俳諧亭句楽の死

一幕

吉井勇

人物

小しん　盲目の落語家
焉馬　落語家
柳橋　同
おたつ　小しんの女房
おとし　句楽の妹
山崎新太郎　文科大学生
おぎん　新太郎の情婦
蝶丸　盲目の新内語り
おせん　蝶丸の女房

所

浅草。

時代

現今。

蔵前附近の大川の河岸に近いところ。中央から稍上手に寄つて盲目の落語家小しんの家。古い家であるが数寄な造作であつて四畳半と六畳との二間つづき。上手の四畳半の座敷の正面には縁側があつて障子を閉め切つてある。上手に襖の出入口があつて台所に通ずる。壁に古い顔見世の番附が貼り付けてある。柱には句楽の『五月雨ややうやう湯銭酒の銭』と書いた短冊を懸けてある。下手の六畳の正面は半窓。窓は障子を閉め切つてある。長火鉢や茶箪笥などが置いてある。下手に格子戸。

格子戸の前は狭い路次。その突き当りは直ぐに大川の河岸となつてゐる。路次の此方に船宿の一部が現はれてゐる。軒に太い字で『網徳』と書いた四角な行燈を懸けてある。三月の始めの或る月夜。路次の向ふに大川の水の面の銀のやうに光るのが見える。

（小しんとおたつとは長火鉢に向ひ合つて坐つてゐる。小しんは三十歳位の痩せた男。盲目で蹇（あしなへ）。絶えず鬱憂な表情を続けてゐる。たとへ快活な言葉で語る時があつても。おたつは二十七八歳位の女。小しんの女房。小しんはおたつに本を読ませて一心にそれを聴いてゐる）

おたつ　（低い声で本を読んでゐる）「その時、風来山人手に持ちし羽扇（うせん）を与へて曰く、是は我仙術の奥義をこめし団扇なり。抑この団扇を以てあほげば、暑き時は涼しき風出で、寒き時は暖かなる風生じ、飛ばんと思へば羽ともなり、海川にては船ともなり、遠近を知り、幽微を見る。身を隠さんと思へば忽ちにして見えざる、奇妙稀代の重宝なり。以て天地の間を往来し、諸国の人情を知るべし。汝が修業成就して、再びこの土に帰りし時、また対面をなすべし。さらばさらばと云ふ声は、障子に残る風の音。浅之進は茫然と光明院の窓の内に、眠るともなく覚むるともなく、机にかかりてもとの如く坐し居たるに、側を見ればかの夢中に授かりし、羽扇ばかりぞ残りける。」（つまらなさうに）何だい。ちつとも面白くないぢやないか。

小しん　馬鹿云つてやがらあ。これからが面白くなるんだ。こりやあ句楽の好きな本なんだぜ。しかしまあ今夜はそこまでにして置かうよ。

おたつ　さうかい。私はもつと読んだつて関はないよ。しかしこの前読んだ「梅暦」の方が余つ程面白かつたね。

小しん　（寂しさうに笑ふ）「梅暦」を読んでゐる時分はおれがもう好いつて云つても聴かずに読んだな。しまひには文句まで覚えつちまひやがつたぢやねえか。おれも昔は「梅暦」が好きだつたが――

おたつ　おや、おや、大変年寄染みたことを云ひ出したね。

小しん　（何事か思ひ出して）あの時分は面白かつたなあ。おれと句楽と焉馬の三人で、ずゐぶんいろんなことをして遊んだものさ。それが今ぢやあおれがこんな盲目になるし、句楽は狂人になりやがるし、達者なのは焉馬ばかりだ。

おたつ　何だね。今更そんなことを云つたつて仕方がないぢやないか。

小しん　うん。（間）さう云やあ句楽はどんな様子だらう。この四五日あんまり好くねえつて話だが、まだ死にやあしねえだらうなあ。

おたつ　何しろあんな病気だからねえ。何時どんなことがあるか知れやしないよ。一昨日もおとしさんが来て話してゐたが、相変らず不動様ばかり拝んでゐるのだとさ。

小しん　ふん、おとしさんが来たのかい。一昨日と云やあおれは山崎の若旦那の所へ往つて留守だつたな。あいつの不動様も久しいものだ。一昨日も若旦那とあいつの不動様の話をしたんだが——何しろまだ死なせたくねえものだな。今時あの位の落語家はありやしないやね。そりやあずゐぶん飲んだくれの怠惰者だが、あれであいつの云ふことは変つてゐて面白いよ。（悲しさうに溜息を吐いて）句楽が死んでしまつたらどんなにこの世の中が寂しくなるか知れやしねえ。

おたつ　しかしあんな狂人になつてしまつてはもう仕方がないね。何しろ可哀さうなのはおとしさんさ。兄さんの看病で夜の目も寝ないものだから、一昨日来た時なんぞはすつかり窶れてしまつてゐるのさ。

小しん　あの女も不仕合せな女さね。女郎に売られてさんざ苦労をした揚句が、あの兄貴があんな有様なんだらう。何時まで苦労するのだか分らねえやうなものだ。（しんみりした調子になつて）おとしさんばかりぢやねえ。おれはお前に済まねえと思つてゐるよ。こんな盲目を亭主に持つて、世話が焼けるだらうが、まあ何かの因縁だと思つて辛抱してくんねえよ。

おたつ　何を云つてゐるんだね。そんな沢市のやうなことは云ひつこなしさ。

小しん　（わざと涙を紛らすやうに笑ふ）到頭沢市にされつちまつたな。

（二人は寂しさうに笑ふ。

下手より焉馬と柳橋が出て来る。二人とも落語家。焉馬は三十五六歳位。柳橋は四十七八歳位。二人とも稍酒に酔つてゐる。焉馬は手に竹の皮包をぶら下げてゐる）

焉馬　（格子を開けて）如何したい。久しく会はなかつたな。

小しん　誰だ。焉馬か。まあ上んねえ。

焉馬　うん、柳橋さんと一所なんだよ。何だかいやに沈んでゐるぢやねえか。（座敷に上つて）おい、おたつさん。うめえものを持つて来たぜ。

（竹の皮包を渡す）

おたつ　何だい、焉馬さん。（開いて）おや、おや、鰒だね。

柳橋　（座敷に上つて）今そいつで一杯やつて来たところさ。

小しん　鰒か。そいつは有難てえ。早速一杯やらかさうぢやねえか。おたつ、酒の支度をしてくんねえ。（二人に向つて）一体今日は何処の帰りなんだね。

（おたつは上手に入る）

焉馬　なにね、今日は句楽の病院へ二人で見舞に往つて来たんだよ。

小しん　今日はまた席を抜いたんだな。何しろ二人とも席を抜くのは名人だぜ。

焉馬　お前さんだつて昔はあんまり抜かない方でもなかつたぜ。

（焉馬と柳橋上手の四畳半の方へ来る。勝手に座布団を出して敷く）

小しん　（独語のやうに）もうおれは高座の湯の味も忘れてしまつたなあ。考へて見れば席へ出なくなつてから、もうかれこれ二年になるぜ。

柳橋　もうそんなことを云ひなさんな。（慰めるやうに）句楽はあんなに狂人になつても、お前のことばかり云つてゐるんだぜ。なあ、今日も句楽は小しんのことばかり云つてゐたな。

焉馬　うん。（小しんに）何だか今日はお前と遊んだ時のことを話してゐやがつたよ。その時はあいつの目には、まるで紫君とお前との二人しか見えねえやうなのよ。あいつが死んだ紫君がまだそこにゐるつもりで、何か口説（くぜつ）見てえなことを云つてゐやがるのを聴いてゐると、おりやあ可哀さうになつて涙がこぼれたよ。

小しん　句楽はまだあの女のことが忘れられねえんだなあ。

焉馬　それからお前に云つてゐる話と云ふのが面白れえんだ。何でもお前が盲目になつたのを、慰めてゐるやうな様子なんだが、その文句が不思議な文句さ。

小しん　へえ、ひとつその文句を伺ひたいものだね。

焉馬　何でも人間にやあ目なんてものは要らねえ。みんな目があるから本当にものを見ることが出来ねえんだ。それだからお前は盲目になつたから仕合せな男だ――とかう云ふんだ。さうして句楽は今に法律を作つて、日本中の人間をみんな盲目にしてしまふ。何でも大きな役所を作つてそこで大勢の役人が片つ端から、呼び出した人間の目を潰すんださうだ。

小しん　（皮肉に笑つて）自分の目は如何する気なんだらう。

焉馬　お役人に目を潰されるのは気が利かねえから、おりやあ自分で潰してしまふんだつて云

つてゐたよ。

小しん　成程ね。盲目になつた方が仕合せかも知れねえなあ。

焉馬　さうして今日はずゐぶん饒舌（しゃべ）つてゐやがつたが、聴いてゐて何のことだか分らねえことの方が多いんだ。（柳橋に）なあ、柳橋さん。どんなことを云つてゐやがつたけな。

柳橋　さうさ。蝮（まむし）の吉兵衛さんの話が大分出てゐたやうだつたぜ。（他の二人に）蝮の吉兵衛さんつて一体何なんだね。

小しん　おや、柳橋さんは蝮の吉兵衛さんのことを知らねえのかね。芝の仕事師で小唄の巧かつた人のことだよ。

柳橋　へえ、お前よく知つてゐるね。

焉馬　蝮の吉兵衛さんのことなら私だつて知つてゐらあね。

小しん　うん、お前もよく句楽から聴かされたなあ。さうしてその蝮の吉兵衛さんが如何したつて云ふ話なんですね。

柳橋　それが如何したつて云ふんだかよく分らねえのさ。何でも句楽が始めてその蝮の吉兵衛さんに会つた時の話らしいのだよ。

焉馬　全く小唄は巧かつたさうだね。句楽はよく云つてゐたぜ。あいつが生れてから以来（このかた）、あ生きてゐた甲斐があつたと思つたのは、その蝮の吉兵衛さんの唄を聴いた時だけださうだ。

柳橋　その人はまだ達者でゐるのかい。

小しん　もう疾らに亡くなつたとも云ふし、まだ生きてゐるとも云ふし何だかよく分らねえんですよ。何しろ狂人の云ふことだから当になりやあしませんよ。（上手の方に向つて）おい、おたつ。早く酒を持つて来や。

（おたつは酒の支度をした膳を持つて上手から出て来る）

おたつ　ほんとに何にもありませんよ。

小しん　まあ好いや。お持たせの鰒で一杯やらう。

焉馬　なあに酒さへありや沢山だ。

（おたつは上手の座敷に膳を置いて、小しんを助けてその傍に連れて来る）

小しん　（自分を嘲けるやうに）盲目で蹇と来てゐるんだからたまらねえ。近頃は乞食にだつてこんなのはゐやしねえぜ。

焉馬　（猪口を取り上げて）おや。こいつは八百善の猪口ぢやねえか。

小しん　うん、そいつは句楽が古道具屋で五厘で買つて来やがつたのよ。

焉馬　さうか。それぢやこいつで一杯飲むとしよう。

（おたつは焉馬の杯に酒を注ぐ。三人は酒を飲み始める。三人とも沈黙。稍長い間）

柳橋　如何したんだい。みんないやに滅入つてゐるぢやねえか。

おたつ　焉馬さん。お前さんまで今夜は沈んでゐるんだね。いつもの通り騒いだら好いぢやないか。

焉馬　何ね、さつきから大分飲つてゐるんだが、如何も今日は酔はなくつていけねえのよ。

小しん　酒を飲んで酔はねえなんて、そんな箆棒な話があるものかな。

焉馬　よし来た。それならこれからうんと酔ふぜ。

小しん　ああ好いとも。うんと酔ひねえ。いくら酔つたつて驚きやあしねえから――

柳橋　おりやあ驚くね。焉馬が酔つぱらつたと来ちやあ手が附けられねえんだからな。この間も二人で一杯やると、これがまた席を抜くやうなことになつたのさ。さうしてそこにお神輿（みこし）を据ゑてしまつて、二人でふんだんに飲んだものなんだ。

小しん　何処でよ、一体――

柳橋　伝法院横丁の例のところよ。

小しん　（面白さうに笑つて）またお菊さんの所へ往つたんだな。

焉馬　（小しんに）お菊さんはお前に馬鹿な惚れやうをしてゐるぜ。なあ、柳橋さん。この間も小しんさんの目は如何かして好くならないかつて云つてゐたな。

小しん　（落語の通人のやうな調子で）如何でげす。盲目になつても小しんには女が惚れやせう。

焉馬　（真面目に）冗談云つちやいけねえ。あの女はぞつこんおれに惚れてゐるんだぜ。

小しん　（調子に乗つて）さう云やあ焉馬つて男も可哀さうなものでげす。あの女に小しんと云ふ色男がちやんと附いてゐるんですぜ。

柳橋　（呆れたやうに）おや、おや、何が何だか話がさつぱり分らなくなつて来たぜ。

小しん　話つて云やあさつきの話の続を聴きてえものだな。焉馬師匠大とらの段てやつさ。大川亭柳橋先生、如何です、一席やつて下さいな。

柳橋　（間を置いて）それからよ。あすこの家を出たのがもうかれこれ十二時なんだ。二人とも家に帰るのは厭だし、何処か遊びに往くのには金はなし、仕方がねえからぶらぶら茶畑を通り抜けて、二天門の方へ歩いて往つたのよ。別に何処へ往くつて当はねえんだが、ひとりでに足の向いた方へ歩いて往つたものさ。こんな時は何でもするね。若しも惚れた女が死ねつて、云つたら、死んだかも知れねえよ。

焉馬　（気が無ささうに）冗談云つちやいけねえ。

柳橋　それから馬道へ出ると、こいつが如何でえひとつ若旦那の所へ押し懸けようぢやねえかつて云ひ出したんだ。おりやもう晩（おそ）いから止せつて云つたんだが、如何しても聴かねえ。

仕方がねえからおれも一所にあの煙草屋を敲き起して、あの二階へ押し上つたものさ。

小しん　ふん、こいつは若旦那も驚いたらうなあ。

おたつ　全く焉馬さんに会つちや敵はないね。

柳橋　まあそれまでは何でもないんだがね。

焉馬　もう止しねえな。あんまり面白くもねえ話だぜ。

小しん　（焉馬に）まあ好いやな。（柳橋に）それから如何したのよ。

柳橋　いや、それからが騒ぎなんだ。まあ歌つたり踊つたりしたまでは好かつたが、しまひにはこいつがあのおぎんさんに戯（からか）ひ始めやがつたのさ。それが酔つて執拗（しつこ）いと来てゐるからたまらねえや。あの気の弱いおぎんさんのことだから、到頭泣き出してしまつたのよ。おりやあんなに困つたことはなかつたぜ。やつと引つ張り出してこいつの家へ送り込んで、家へ帰るともう夜が明けてゐるぢやねえか。何しろ若旦那の所へはちよつと顔出しが出来ねえ始末になつちまつたんだ。

小しん　（笑つて）焉馬はいつも酒と女でしくじるなあ。もつともそれより外に能のねえ男だが——

焉馬　ひでえことになつたもんだな。

小しん　何もそんなに悄気（しよげ）なさんな。そんなことは句楽は毎日やつて来たんだあな。（急に悲しさうに）しかし句楽もまだ死なせたくはねえな。おりやあ目が見えなくなつてから、如何

云ふものだかあいつの云つた言葉ばかり思ひ出されて仕方がねえ。あいつは全く唯の落語家ぢやねえぜ。あいつの考へてゐることはみんな真実のことばかりだ。盲目にならねえ前には気が付かなかつたことも、かうやつて盲目になつてから考へて見ると、あいつ位真実のことを云つてゐたやつはありやしねえ。

焉馬　（不思議さうに）さうかなあ。おりああいつ位嘘吐きはねえと思つてゐたんだぜ。

小しん　おれも盲目にならねえ前は、やつぱりさう思つてゐたものよ。句楽のやつまた法螺を吹き出しやがつたと思つて、別段気にも留めずに聴いてゐたが、今考へて見りやあそりやみんな真実だつたんだな。全く不思議な様に近頃はあいつの言つた言葉を思ひ出すよ。（考へるやうな顔付をして）句楽はよくこんなことを云つてゐたらう。人間の霊魂つてやつは、硝子の壜見てえなものだつて——あいつはほんとだぜ。おれは盲目になつてからその硝子の壜見てえなものが、目の前にちらついて仕方がねえんだ。

柳橋　変なことを云ひ出したな。句楽見てえなことを云つちやあいけねえぜ。

おたつ　ほんとに近頃は余つ程云ふことが変なんですよ。

小しん　それが凡夫の浅猿（あさま）しささねえ。おれの云ふことが変に聴えるやうぢやあ、まだまだ中々句楽の云ふことは分りやしねえよ。

焉馬　おい、もうそんな話は止さねえか。それより飲んでうんと騒がうぢやねえか。

小しん　まあ、待ちな。もう少しおれの話を聴いてくれても好いだらう。（間）それからまた句楽

がこんなことを云つたことがあるんだ。この世の中位馬鹿々々しい所はねえ。何が嘘で何が真実だかまるつきり分りやしねえ。しかしその中でたつたひとつ誰でも真実にしてゐることがある。そりやあ死ぬつて云ふことだ。

（焉馬はつまらなさうに低い声で唄をうたつて居る）

柳橋　死ぬなんて話は止さうぢやねえか。

小しん　それぢやあこの話は止めにしよう。だが如何だい。今日の句楽の様子は——

柳橋　今日は大変元気だつたぜ。おれ達があいつの部屋に入ると、丁度あいつは本を読んでゐるところさ。何を読んでゐるのかと思つて見ると、それは例の風流志道軒伝なのよ。

小しん　（驚いて）おや、おれもさつきまでそいつを読んでゐたんだぜ。

柳橋　（同じやうに驚いて）さうかい。そいつは不思議だな。（間）それから三人でいろんな話をしたんだが、相変らず句楽のやつは傍に紫君がゐる気でゐるらしいんだね。またいつもの通り蝮の吉兵衛さんの話をする時分になるともう分らねえ。小猿七之助だの、鳥追お松だのしまひには白井左近まで出たつけ。そのうちあいつは如何云ふ気だか運座をやらうつて云ひ出しやがつたのよ。

小しん　さうか。運座をやつたのか。

焉馬　（柳橋に代つて話し続く）やつたことはやつたが、句楽の句が面白れえのよ。なあ、柳橋さん何とか云つたな。句楽の句は──

柳橋　さうよ。さつきまで覚えてゐたんだが──ええと、ひとつはかう云ふんだ。グランドの植ゑし桜は燕枝かな。

焉馬　如何でえ。何だかさつぱり分らねえだらう。

焉馬　それからもうひとつ面白れえ句があつたな。それ、清正公が何とか云ふやつよ。

柳橋　うん、盲目の清正公や初桜つてやつだらう。

焉馬　この盲目つて云ふのは、やつぱりお前のことを考へてゐたからのことなんだね。

小しん　面白れえな。狂人中々味をやるぢやねえか。

焉馬　うん。まあ運座までは好かつたんだが、それから凄い一幕があつたんだぜ。

小しん　如何したのよ。

焉馬　お前も知つてゐるだらう。あいつが大事にしてゐる嫐（うはなり）の根付の着いた煙草入があるだらう。急に立ち上つてあいつを出して来たから、何をするのかと思つたら、句楽のやつ凄い顔をしてあの根付を睨み付けてゐやがるのよ。さうしてまた始めやがつたなんて云ふぢやねえか。

小しん　ふん、それから──

焉馬　さうしてあいつはそれから悲しさうな顔付で、あの嫐の根付の話を始めやがつたのよ。よく聴いて見ると何でも句楽の目にはその根付が、あいつが子供の時分に見たつて云ふ、

夜嵐お絹の曝し首に見えるらしいんだね。それがしまひにはまるで惚れた女にでも会つてゐるやうな調子で、もう直きお前の所へ往くから待つてゐてくれの、久しく会はねえのと、いろんなことを云つてゐるのよ。その時の句楽の顔付つたらなかつたぜ。二人は気味が悪くなつて、直ぐに帰つてしまつたのよ。（間）あいつももうあんまり長げえことはねえぜ。

小しん　さうさな。おれも如何もそんな気がして仕方がねえんだ。しかしおれも今日やつぱり風流志道軒伝を読んでゐたんだが――

焉馬　何もそんなことを気にしなくつても好いぢやねえか。

小しん　何も気にしやしねえけれど――何だか馬鹿に句楽に会ひてえやうな気がするよ。会つたつて顔を見ることも出来ねえんだけれど、せめて話でもしてえなあ。

（下手から新太郎が出て来る。二十二三歳位。直ぐ格子戸を開けて家の中へ入る）

新太郎　やあ。みんなお揃ひだな。（座敷に上つて来る）

小しん　若旦那ですね。今丁度一杯やつてゐるところでさあ。

おたつ　（座布団を進めて）さあ、若旦那どうぞお敷き下さいまし。

新太郎　相変らず無頼漢が集つてゐるんだね

焉馬　いや、どうも――若旦那、先日はどうも相済みません。
新太郎　なあに済むも済まないもありやしないよ。それよりも僕はあれから如何したかと思つて心配してゐたんだよ。
小しん　しかし若旦那はえらいよ。一昨日私が伺つた時に、そんな話はちつともしなかつたね。
焉馬　（杯を新太郎に差す）若旦那、ひとつ如何です。
新太郎　や、有難う。如何だい、焉馬さん。何か面白いことでもないかね。
焉馬　面白いことつてまるつきりありませんね。第一世の中が悪くなりましたよ。女だつてほんとに惚れて来るやうなやつはありませんぜ。
小しん　しかし若旦那のおぎんさんはありやあ別さ。
焉馬　おぎんさんて云やあ、まだ追手は懸りませんかね。
新太郎　家でも呆れてしまつたと見えて、何とも云つて来ないやうだよ。
柳橋　（始めは歌ふやうに）野暮な屋敷の大小棄てて、腰も身軽な町住居つてね。若旦那もこれで洒落れた人さ。
新太郎　あんまり洒落れてもゐやしないよ。しかしあの煙草屋の二階を借りた当座は、何だか二人でゐるのが寂しかつたけれど、馴れてしまうと結句気楽さ。かうやつて世間を忘れたやうにして暮らしてゐるのも、また面白いやうな気がするね。
小しん　全くさうですよ。一体世間なんてものを相手にしてゐたらきりがありませんや。（怒つた

やうな調子で）世間ぐらゐ始末にならねえものはありやあしねえ。まあ盲目になつてご覧なさい。その世間つてやつがはつきり形に現はれて来ますぜ。頭もなければ尻つ尾もねえ。まるで妲妃のお百の芝居に出て来る海坊主のやうなもんでさあね。

焉馬　馬鹿なことを云つちやいけねえぜ。

小しん　嘘ぢやあねえよ。全くさう云ふものが見えるんだから不思議さね。だから私は盲目になつてもいろいろ今まで見えなかつたものが見えるから面白いのさ。私は自分の盲目になつたことなんぞは何とも思はねえが、唯気になつて仕方がねえのは句楽ばかりさ。

新太郎　さうさね。如何も今度はすこし覚束ないやうだね。

小しん　ええ、今日も柳橋さんと焉馬とが、病院へ見舞に往つて来たさうですが、元気は中々あるけれど云ふことが大分変なんださうですよ。今日はあの嫐の根付の着いた煙草入ね――若旦那もご存知でせう――あれと話をしてゐたさうですよ。

新太郎　あれは句楽が大事にしてゐた煙草入だぜ。

小しん　ええ。あいつは句楽が生命よりも大事にしてゐたもんですよ。きつとあの煙草入が句楽に何か話し懸けるんでせう。私はさうに違えねえと思ふんだが――

新太郎　さう、さう。何時だか枕元に置いてあつた水差が、口をきいたつて話があつたつけなあ。

小しん　やつぱりそれと同じわけさね。

焉馬　しかしそいつを傍で見てゐると、何だか涙がこぼれる様な心持がしますぜ。あいつと一

所に遊んだ時分のことを考へたりして、ああ句楽もこんなになりやがつたかと思ふと、人間てものは分らねえものだと、私はつくづく考へましたね。

新太郎（笑つて）焉馬さんもそんなことを考へるかな。

焉馬　そりやあ私だつて考へまさあね。

小しん（沈んだ調子で）こんな落語家見てえな稼業してゐるものは、存外哀れなことばかり考へてゐるものですよ。

（沈黙。新太郎は悲しさうに小しんの顔を凝視めてゐる）

柳橋　いや、話が理に落ちて来たぢやねえか。如何でえ。もう少し杯を動かさうぢやねえか。

焉馬（急にはしやぎ出す）よし来た。さあ、今夜は飲み明かさうぜ。

小しん　盲目ながらも柳亭小しんだ。そんなことは敢て辞しやせんな。ねえ、若旦那。あなたも私達の仲間入りをした以上は、飲み明かす位のことは怖れねえでせう。

新太郎　当り前さ。そんなことを怖がつてゐたら、ここの閾は跨げやしないやね。

（皆盛んに酒を飲む。新太郎は座敷の隅に置いてあつた異様な形の兜に目を付ける）

新太郎　おい、小しんさん。そこに置いてある兜のやうなものは何だい。
小しん　あれが例の句楽の兜さ。
新太郎　変な形の兜だなあ。如何云ふ訳で句楽はあんな兜を作つたのだらう。何しろ大変なものを作りやがつたぢやないか。（焉馬に）おい、焉馬さん。ちよつと取つて呉れないか。

（焉馬はその兜を取つて新太郎に渡す）

焉馬　若旦那。まあその兜の裏をご覧なさい。持主俳諧亭句楽と書いたこつちに、柳田金次郎作と本名を書いたところがをかしいぢやありませんか。
小しん　ねえ、若旦那。句楽がこの兜を作つた訳が面白いんですぜ。句楽はよく今に戦があるつて云つてましたらう。この前に気が狂つた時から、そのことを云つちやあ騒いでゐましたよ。それ、金持と貧乏人の戦つてやつさ。句楽はその戦の時には貧乏人の大将になつて出懸けるんだつて云ふんで、一しやう懸命に作つたのがこの兜なんでさあ。この前の時にはこの兜を冠つて病院中を暴れ廻つて困つたさうですよ。
新太郎　ああ、その戦の話は僕も聴いたよ。それぢやあその戦に出懸けるつもりでこの兜を作つたんだねえ。（兜を凝視めてゐる）
小しん　ええ、あいつはその戦を今か今かと待ち構へてゐたんですよ。だから病院に入つてゐて

も気が気ぢやあねえね。それで軍書を読むつもりで梅暦や風流志道軒伝を読んでゐるんだから面白いよ。

焉馬　その兜から思ひ付いて句楽が作つた端唄があつたつけな。もう狂人になつてからだからずゐぶんをかしな文句がありましたぜ。誰か覚えてゐねえかな。

小しん　うん。おりやあ覚えてゐるよ。

新太郎　さうかい。ちよつとうたつてお聴かせな。

焉馬　（おたつに）おたつさん。ちよつと三味線を取つてくれないか。

（おたつは壁に懸けた三味線を袋から出して焉馬に渡す）

焉馬　（調子を合せて）おい、この位で好いかい。

小しん　もつと調子を低くしてくんねえ。

焉馬　よし。（調子を低くする）

小しん　おれもうろ覚えだから文句の違つてゐるところがあるかも知れねえよ。

焉馬　どうせ狂人の作つた唄だあな。

（小しんは歌ひ出さうとするけれど声が出ない。何時か涙が盲ひた目の外に溢れて来る。）

（焉馬は驚いて三味線の手を留め小しんの顔を見る）

焉馬　如何したんだい。

小しん　（何気ない様子で）如何もしやしねえよ。さあ、弾いて呉れ。顫え付きてえやうな好い声を聴かしてやるから――

焉馬　（弾きながら独語のやうに）久しく小しんの唄も聴かねえなあ。

小しん　（うたひ出す）
「死ぬと云ふ、死なねばならぬ今日となり、紫君の髷の天神は、諏訪法性のおん兜、一夜会はねばわれもまた、兜の下のきりぎりす、ほんに哀れぢやないかいな」

（歌ふ間絶えず小しんの目から涙が溢れ、頬を伝つて流れる。新太郎も目を潤ませて聴いてゐる）

新太郎　おれは小しんさんの唄は始めて聴いたよ。

小しん　（寂しさうに笑つて）いや。もう大変な声で――（焉馬に）久しくうたはねえから、これだけのもんでも苦しいね。

爲馬　さうだらうな。しかし変な文句だな。如何しても狂人の作つた唄だね。

柳橋　こいつにも紫君つて名が入つてゐるね。

焉馬　あいつは余つ程紫君に惚れてゐやがつたんだな。

小しん　さう云やああんなに気が変になつたのも、紫君が死んでからのことですぜ。

焉馬　（小しんに）しかしお前さんの声はすつかり変つてしまつたね。

小しん　そりやあ盲目になつてからは、如何しても声の調子が変つてしまふよ。何しろ何処から声を出して好いんだか、盲目になり立てにはまるで見当が付きやしねえもの――今まで見えてゐたのがまるで見えなくなつてしまふんだからなあ。毎日々々夜ばかりで真つ暗な中から人の声が聴えて来るんだから情ないやね。

焉馬　さあ、もうそんな話は止めにしねえ。おれが弾くからみんなうたふんだぜ。さあ、柳橋さん。何かひとつやんねえな。

（焉馬は三味線を弾き始める）

柳橋　（うたひ出す）

「かのひとをしんぞ思へばこの癪が、胸に差し込む窓の月、つづれさゼてふ蟋蟀、年が明くれば詫住居、肩させすそさせ虫の声声、世帯染みたと云はれたい。」

（焉馬は一人面白さうにはしやいでゐる）

焉馬　よう、よう、面白くなつて来たぜ。如何です、若旦那。何かひとつおうたひなさいな。

新太郎　僕はうたへないよ。

小しん　冗談云つちやあいけません。私はちやんと知つてゐるんだから――

柳橋　若旦那。隠しつこなしさ。

新太郎　僕はほんとにうたへないんだよ。

爲馬　それぢやあ私がひとつやりませう。（弾きながらうたふ）

「裏の土蔵のなか、姉やんとつんつらつん、片手に提灯片手に土蔵の鍵、しばし待ちなはれ、髪を結うてしまうてね、おつかあやんを寝せ置いて、お代理参りと云うて出懸けませう。つんつらつんつらつんつらつん、四五日このかた会はなんだ、何から何まで話しましよ、勿体ないがお代理参りは、明日の晩といたしましよ、つんつらつんつらつんつらつん。」

小しん　こいつは句楽が好きな唄だぜ。よし来た。おれももうひとつやらう。

焉馬　何をやるんだい。

小しん　身ひとつをつてやつよ。今夜は句楽の好きな唄をみんなやつてしまはうぢやねえか。

焉馬　うん。さあ、好いぜ。

小しん　（うたひ出す）

「身ひとつを置所なき胸のうち、一重の心八重に解き、指きり髪きり野暮な起請を神さんへ、お世話をかけて烏羽玉の、恋の闇路ぢやないかいな。」

（今度は小しんは涙を流さないでうたふ）

焉馬　うめえ、うめえ。今度のは昔の小しんの唄を聴いてゐるやうだつたぜ。

新太郎　今夜句楽がゐたらさぞ面白かつたらうなあ。

小しん　あいつがゐねえと何だか寂しいやうな気がしますね。

新太郎　句楽は今頃如何してゐるかな。

焉馬　若旦那。また鬱いでゐますね。

（この時河岸の近くを声色つかひの舟が通り過ぎる。拍子木の音などが聴こえて来る）

焉馬　ありやあ声色つかひの舟だな。

小しん　うん、中洲や代地であぶれたやつが帰つてゆくのよ。

焉馬　如何でえ。あいつを呼ばうぢやねえか。

小しん　うん、あいつを呼んで柳橋さんの声色でも聴くかな。
焉馬　（障子を開けて縁側へ出る）おおい、声色屋やあい。

（開けた障子の間から大川の水の面や、河向ふの灯明りなどが見える。舟の中で声色つかひが「どうも有難うございます」と云ふ声が聴こえる。焉馬は障子を閉めて元のところへ坐る）

小しん　（障子の外に向つて）おい何んでも好いからやつてくんねえ。
焉馬　好い景色だな。向ふ河岸はまるで芝居の書割のやうだつたぜ。
小しん　さうか。おれにはそれが見えねえんだから情ねえ。

（声色をつかふ声が聴こえる。「梅雨小袖昔八丈」の閻魔堂橋の出会のところ。座敷では関はずに話し続けてゐる。）

新太郎　何だかここでかうやつて君達と話をしてゐると、家のことや世の中のことなんぞ忘れてしまふね。
小しん　さうでせう。あなたはどつちが好いと思ひますね。お宅にゐて堅苦しい学問をしてゐる

のと、かうやつて呑気に日を送つてゐるのと――私はかうやつて日を送る方が、人間真実の暮らし方ぢやないかと思ひますがね。

新太郎　僕だつてさう思へばこそ家を飛び出して、あんな女と一所に暮らしてゐるのだ。

焉馬　しかし若旦那もずゐぶん変つた方さね。小間使と一所にあんな汚ない煙草屋の二階にゐるなんて――お宅にいらつしやりやあ若旦那で立派にやつてゆける方ぢやありませんか。

新太郎　それが嫌ひだから因果なんだよ。考へて見れば僕がこんなことを考へるやうになつたのも、みんな句楽の為めだと思ふよ。句楽は僕に如何して生きたら好いかつてことを教へて呉れたのだ。さうして僕はあいつの云ふ通りになつたのだ。

（声色が終ると同時に急に寂寞となる）

小しん　柳橋さん。丁度鳴物がお誂へだね。ひとつ十八番の五代目でも聴かうぢやあねえか。（障子の外に向つて）おい、鳴物だけやつてくんねえ。柳橋さん。何をやるね。

柳橋　さうさな。例によつて野晒悟助でもやらうよ。粋菩提悟道侠客――（声色をつかふ）

（柳橋の声色の終る少し前に、おぎんが下手から出て来る。格子戸の前に佇んでゐる）

柳橋　（声色を終つて）いや、如何もいけねえ。年を取ると声が続かねえよ。
焉馬　まだそんな年でもねえぢやねえか。
小しん　（おたつに）おい、おたつ。

（おたつは障子を開けて縁側に出て、声色つかひに金を遣り、また元のところへ坐る。声色つかひの舟は拍子木を打ちながら次第に遠ざかつてゆく）

おぎん　（格子の外で）ご免下さいまし。
小しん　おや、誰だか来たやうだぜ。
おたつ　（立ち上つて）どなた――関は、ないからお入んなさいましよ。（おぎんを見て）おや、おぎんさんですね。
おぎん　（云ひにくさうに）あの、何はこちらへ伺つてをりますでせうか。
おたつ　若旦那ですか。ええ、いらつしやいますよ。
新太郎　（坐つたまま）おい、何か用があるのかい。
小しん　おぎんさん。まあ、お上んなさい。

（おぎん格子戸を開けて中に入り長火鉢の傍に坐る）

おぎん　あの今句楽さんからお使が来て、こんな手紙を持つてまゐりましたよ。（手紙を出す）

新太郎　句楽から手紙だつて――何だか変だな。どらお見せ――柳橋さん、はばかり様。取つて呉れないか。

（柳橋はおぎんから手紙を受取つて新太郎に渡す）

新太郎　（手紙を開いて）何だらう。

小しん　少しをかしうござんすね。句楽から手紙だなんて――あの狂人から手紙が来るなんてことはねえと思ふんだがね。

新太郎　さうさな。何だか不思議なやうな気がするね。（手紙を見る）何だかまるで読めやしない。

小しん　若旦那。読んで聴かして下さいよ。句楽の手紙なら私も聴きたいやね。

新太郎　ちよつとお待ちよ。今読むから――（手紙を読む）私は今日より志道軒と一所に、旅をするつもりに御座候。何処へ往くと云ふあてもなく、例の通り飄然として――飄然の飄の字に氷つて字が書いてあるぜ。

焉馬　（笑つて）飄然として溶けるつもりでゐやがるんだな。

新太郎　（手紙を読みつづける）飄然として旅を致すべく候。志道軒と二人連れに候へば、何か

と面白きこともあるだらうと思ひ、それが楽しみに御座候。くはしきことは旅先より申上ぐべく候。何だか発句見たいなものが書いてあるぜ。（読みにくさうに考へてゐる）行く春やきちがひ二人旅に出るか。

小しん　自分で狂人つて云つてるところは面白いね。しかし何だかまるで謎見てえな手紙ですね。

新太郎　あいつは如何云ふ気でこんな手紙をあなたの所へ寄越したのだらうな。

おぎん　おい、おぎん。この手紙を持つて来た人つて云ふのは、一体どんな人だつたい。

小しん　何だか気味の悪いお爺さんでしたわ。顔に一杯痘痕（あばた）があつて、め組と書いた差つ子を着てゐましたよ。

おぎん　（驚いて）何ですつて、おぎんさん。そのお爺さんは顔に痘痕があつて、め組の差つ子を着てゐたんですか。

小しん　ええ。

焉馬　うん、それぢやあいつに違えねえ。なあ、焉馬。

小しん　あいつつて誰よ。

焉馬　今め組の差つ子を着てゐる人なんぞありやあしねえぜ。それに顔に痘痕があると云やあ大抵見当は付くだらう。

小しん　分らねえな。

　　　　そいつは蝮の吉兵衛さんだぜ。

（皆驚いて顔を見合はせる。下手からおとしが出て来る。格子戸を開けて家の中に入る）

おたつ　おや、おとしさんが見えましたよ。

焉馬　如何したい。おとしさん。

小しん　まあこつちへお上んなさい。今不思議な手紙を読んでゐるところさ。

（おとしは座敷に通ると同時に急に泣き始める）

新太郎　如何したんだ。

小しん　黙つて泣いてゐちやあ分らねえ。

（沈黙）

おとし　（歔欷しながら）あの兄は到頭さつき亡くなりまして――

新太郎　何だつて――句楽さんが死んだつて――ほんとかい。

おとし　ええ。急に容体が悪くなりまして、さつき到頭呼吸を引き取つてしまひました。

新太郎　さうか。句楽は到頭死んだのか――

（手紙を握つた新太郎の手は微かに顫ふ）

おとし　さつき焉馬さんと柳橋さんがいらつしつた時分は何ともなかつたのですが、あれからまた例の紫君と話を始めたのでございますよ。さうして一人で泣いたり笑つたりしてゐましたが、そのうち若旦那の所へ手紙を出すんだつて、何か書いては破つたりした揚句、しまひにやつと書き上げた手紙を持つて、外へ出懸ようとするのでございます。

新太郎　（怖しさうに）ふうん、僕の所へ手紙を書いたんだね。

おとし　ええ。さうすると若旦那、不思議ぢやありませんか。あの部屋の戸がすうつと開いたのでございます。さうして誰か入つて来たやうな気勢がしましたが、それと同時に兄は誰かと話を始めました。よくよくその言葉を聴いて見ると、それがあの蝮の吉兵衛さんと話をしてゐるのぢやありませんか。

小しん　ねえ、若旦那。私の云つた通りでせう。

おおし　それから急に容体が悪くなりましてね。ものの一時間と経たないうちに呼吸を引き取つてしまつたのでございます。

（沈黙。長い間。小しんと新太郎とは声を立てずに泣いてゐる）

焉馬　（おとしに）おとしさん、今病院には誰もゐねえんだね。

おとし　ええ。病院の方が附いてゐるだけです。

柳橋　それぢやあ焉馬さん。おとしさんも女のことだし、何かと後の用事もあるだらうから、これから病院へ往つて来ようぢやねえか。

おとし　実はそのお願に上りましたので――

焉馬　それぢやあ直ぐ出懸けよう。

小しん　おれが目が見えると一所に往くんだがなあ。

（柳橋とおとしは一所に格子戸から出て下手に入る）

小しん　（悲しげに）若旦那。到頭句楽も死んでしまひましたね。

新太郎　ああ、何だかまるで夢のやうな気がするねえ。つひこの間まで一所に飲み歩いてゐたんだが考へて見りやあ句楽が死んだことは、僕に取つてどの位悲しいことだか知れやしない。僕はあいつがゐるんでこんなにその日その日を送るやうな暮らし方をするやうになつたのだ。あいつの口から出る警句の中から、真実の事を聴くのを喜んで、今日までか

うやつて暮して来たのだ。もうあいつが死んでしまつたら、あんな警句を聴くことが出来ないからなあ。

小しん　若旦那。私だつて句楽が死んだことがどんなに悲しいか知れやしねえ。あいつと私とは何か因縁があるやうな気がして仕方がねえ。あいつが狂人になると同時に、私も盲目になつてしまつたんです。しかしその時私はどんなに狂人になつた句楽が羨ましかつたか知れやしねえ。あなたは盲目になつた時の心持をご存知ないでせうが、この位世の中に悲しいものはありやしませんぜ。

新太郎　そりやあさうだらうなあ。

小しん　しかし狂人は好うござんすよ。世の中に狂人ぐらゐ自由な人間はありやあしねえ。何を云つたつて何をしたつて、ありやあ狂人だと云ふんで通つて往くんだ。考へて見りやあ句楽なんぞもずゐぶん勝手なことを云つたりしたりして来ましたぜ。（思ひ出すやうな顔付をして）さうでしたなあ。始めて気が狂つた時のことでしたよ。いきなり私の所へ飛び込んで来て、これから深川の不動様へ往くから一所に来ねえかつて云ふんでせう。まあ、その時の形が不思議さね。何処で探して来たんだが、職工の着るやうな服を着て、箒を持つてゐるんですよ。何をしに往くんだつて聴いたら、何しろ今の世の中には、霊魂の粉が一杯に散つてゐるから、そいつを掃き集めに往くんだつて云ふんでせう。如何して深川の不動様へ往くんだつて聴くと、親分の家から掃除を始めるんだつて云やがるの

さ、不動様を親分だと思つてゐやがるんだから面白いよ。（急に悲しさうに）しかしもうその句楽にも会へねえんだなあ。

新太郎　句楽が掃除しないと世の中はまた霊魂の粉だらけになるぜ。小しんさん。僕もちよつと病院へ往つて来るよ。（立ち上がつて）ああ、それから道で蝶丸に会つたから、ここに来いつて云つて置いたから来るかも知れないよ。

小しん　（寂しさうに）若旦那。もう少しここにゐて下さいな。私一人になると寂しくつて仕方がないから――

新太郎　さうかい。それぢやあもう少しゐよう。（おぎんに）お前はもう帰つても好いよ。

（おぎんは挨拶して出てゆく。下に入る。殆んど入れ違ひに蝶丸とその女房おせんが出て来る。蝶丸は盲目の新内語り。三十四五歳。おせんは二十五六歳）

蝶丸　（格子戸の外より）ご免下さいまし。

新太郎　（声を聴き付けて）誰だい。蝶丸さんかい。

蝶丸　へえ。左様でございます。

おたつ　お上んなさいよ。

（蝶丸とおせんは家の中に入つて、長火鉢の傍に坐る）

小しん　蝶丸さん。句楽が死んだよ。

蝶丸　へえ、ほんとですかい。惜しいことをしましたな。

小しん　（何か考へながら）句楽は何が好きだつたかな。

蝶丸　さうさね。尾上伊太八か――新兵衛小女郎なんども好きのやうでしたね。

新太郎　句楽も旅に往つた人だ。「比翼の初旅」でもやつてもらはうぢやないか。

小しん　若旦那。さうしてこの新内を聴きながら思ふ存分私を泣かして下さい。ね、よござんすか。笑つちやいけませんぜ。私は今夜は泣きたくつて泣きたくつてたまらねえんだから

――

新太郎　小しんさん。おれも一所に泣かうよ。それぢやあ、蝶丸さん。「比翼の初旅」をやつて呉れないか。それが句楽紫君だつたらあいつも嬉しかつたらうになあ。

小しん　志道軒と一所に旅をしてゐる気だから可哀さうですよ。

（蝶丸はうたひ始める。おせんは三味線を弾く）

蝶丸　（うたふ）

幕

底本
吉井勇全集　第五巻
著者　木俣修　編集並に解説
出版者　番町書房
出版年月日　昭和38